

絵本作家や作品世界の魅力伝える 子どもと絵本の幸せな出会いを

こども・本

この人に聞く

Interview

吉田 新一さん 英米児童文学研究家



「ネスビットの作品などの翻訳もしましたが、私は研究のほうが向いていたと思います。カナダ、アメリカ、イギリスの留学から帰ってきてから、英米児童文学の翻訳をされていた瀬田貞二さんや渡辺茂夫さんたちとも交流するようになり、耳学問が増えました」。

「ピーターラビット」の魅力

昨年末に刊行された『イギリスの絵本 下』には、アーディゾーニ、パーニンガム、ブレイク、そしてポターが登場する。吉田さん独特の親しみやすい文体で、絵本作家それぞれの人となりや作品の魅力が語られ、楽しい講座を聞いているかのように読み進められる。

上下巻を通して、ビアトリクス・ポターについてのページが大部を占めており、吉田さんはポターについてこう語る。

「アメリカの絵本作家センダックが、絵本のことを“言葉が語っていない時は絵が物語り、絵が語っていない時は言葉が語る”と言いましたが、それをまさに実践したのがコルデコットで、それをさらに広げたのがポターなんです」。

朝倉書店から刊行されている「連続講座く絵本の愉しみ>」は、『アメリカの絵本』に続き、『イギリスの絵本』上巻が昨年6月に、下巻が12月に刊行された。著者である、英米児童文学研究家の吉田新一さんに、お話をうかがった。

そして、『ベンジャミン パニーのおはなし』を例に挙げ、ベンジャミンのお父さんがベンジャミンのおしりをぶつたと文にあるが、絵のベンジャミンはすでにおしりをさすって、ぶたれているのはピーター、というように絵と文が交互に出ている様子を楽しんで語ってくださった。

「絵と文が連動していて、文の組み方、句読点、ページのめくりも、まるで楽譜のようなんです。次に何が出てくるんだろうと、読んでもらっている人にサスペンスを与えているんです」。

吉田さんがポターの作品の研究

をするようになったきっかけをお尋ねすると、話は1960年代の終わり、学園紛争の時代に遡った。

英米児童文学を大学で教える

当時、吉田さんは立教大学で英米文学を教えていたが、学園紛争で授業ができない時期があり、ようやく収束に向かったころ、新しいカリキュラムの導入の必要があった。「英米児童文学はどうか」と提案したら、結局吉田さん自身で授業をやることになってしまったという。

しかし、当時日本にはまだ良質な翻訳児童文学が少なく、付け焼刃的な授業しかできず、「海外に勉強に行かなくては」と思った。

石井桃子さんとの出会いがあり、



『イギリスの絵本』上、下 吉田新一・編著 朝倉書店 2018



『絵本の事典』
中川素子・吉田新一ほか・編
朝倉書店 2011



『ピーターラビットの世界』*
吉田新一・著
日本エディターズスクール出版部 1994



『絵本の魅力：ビュイックから
センタックまで』*
吉田新一・著
同左 1984



『絵本／物語るイラストレーション』*
吉田新一・著
同左 1999

(*は重版未定)

そしてカナダではライブラリアンのリリアン・スミスさんと会い、その後幸運なめぐりあわせで、イギリスのポター研究の第一人者、レズリー・リンダーさん、英米文学研究者ブライアン・オルダーソンさんという、いきなりトップの研究者たちと出会うことができました。「本当にラッキーな出会いでした。なにしろ、授業をやらなくてはならないので、私も死にものぐるいで勉強しました」。

子どもに絵本を手渡す原点

実はさらにその前に、“子どもの本”に目を向けるようになった出来事があった。

「最初の息子が3歳のとき、たまたま私の姉が与えた絵本『てぶくろ』に夢中になる姿を見て、衝撃を受けました。いったい何が子どもをひきつけているのか、その謎を知りたいと思ったんです」。

また、姉はあてずっぽうに絵本を買ったのではなく、書店の専門の人に「子どもが喜ぶ本はどれですか」と相談してすすめてもらったという。

「それがとてもよかったと思うんです。子どもの本は、長年、子どもに読み聞かせをしたりして反応を直に見ている方の意見を聞くことは、とても大切だと思います。どういう本に子どもは関心を示すのか、その原点を押さえて、与えるべきだと思うんです。小さな私の体験ではありますが、とても幸せなプロセスを経て、息子に絵本が手渡されたんですね」。

石井桃子さんとの交流

そのころ日本では、子どもの本の専門家であるライブラリアンがなかなか育たない状況にあった。そんな中、石井桃子さんの「かつら文庫」を母体に作られた東京子ども図書館で、吉田さんは長年評議員を務められ、石井さんとも晩年まで交流があったという。

「石井さんは、子どもと波長のよく合う方だったと思います。子どもの本については、とてもしっかりした考えを持っていらして、時に厳しいこともびしっとおっしゃいました」。

日本の児童文学の黄金期に

「日本でも1970年代は、子どもの本の黄金期でしたね。戦後の復興、子どもも多くなり、経済も豊かになり、子どもの本について真剣に考える機運が生まれ、作家たちも精神的に書き始めました。海外の優れた作品も、次つぎ出版されました。そんな時代に遭遇できたのも、こういう研究をしていくうえで、ラッキーだったと思います」。



お話の中で、たびたびラッキーという言葉が使われていたが、児童文学を通しての国内外さまざまな人との出会い、作品との出会いは決して偶然ではなく、吉田さんの探求心と行動力、お人柄が織りなした必然的な出来事だったように感じられたひとときであった。「連続講座〈絵本の愉しみ〉」第4巻『日本の絵本』も、心待ちにしたい。

《吉田新一さんプロフィール》

1931年、東京都に生まれる。立教大学教授、日本女子大学教授、日本イギリス児童文学学会会長、絵本学会初代会長などを経て、現在立教大学名誉教授、軽井沢絵本の森美術館名誉顧問。『イギリス児童文学論』（中教出版）など英米児童文学、絵本の研究書や翻訳書多数。